様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月　 １ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2016
課題番号：２６７７０１４６

研究課題名（和文）中国北方のモンゴル系危機言語の文法記述とドキュメンテーション

研究課題名（英文）Linguistic description and documentation of endangered Mongolic languages spoken in northern China

研究代表者
山越　康裕（YAMAKOSHI, Yasuhiro）

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授

研究者番号：７０４５３２４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、1）中国北方のモンゴル諸語（シネヘン・ブリヤート語、ダグール語、モンゴル語ホルチン方言）の言語資料の蓄積と公開、2）シネヘン・ブリヤート語の文法記述、3）古い時代のモンゴル語と現在のモンゴル諸語の文法形式の異同に関する比較・対照、の3点を目的とした。1）に関しては2編の資料、2)，3）に関しては各1編の論文を公刊した。公刊論文では、シネヘン・ブリヤート語の文末に見られる人称標識の使い分け（述語人称／所有者人称）が、中期モンゴル語における文末の動詞屈折形式の使い分け（定動詞／形動詞）の使い分けと並行的であること、それがユーラシアに広く見られる類型であろうことを指摘した。

研究成果の概要（英文）：The aims of this research project are 1) the documentation and publication of the Mongolic languages (e.g., Shinekhen Buryat, Dagur, and Khorchin Mongolian) spoken in northern China; 2) the grammatical description of Shinekhen Buryat, and 3) a comparative analysis of Mongolic languages. As regards 1), I published two language texts with grammatical analyses of Shinekhen Buryat and Khorchin Mongolian. I also published two papers pertaining to 2) and 3). With regard to 3), in particular, I pointed out that the opposition between predicative markers and possessive markers in sentence-final position in modern Shinekhen Buryat is co-related to the opposition between finite verbs and participles in Middle Mongolian. Furthermore, I suggested that such opposition might be widely found in Eurasian languages.

研究分野：言語学

キーワード：言語ドキュメンテーション　記述言語学　モンゴル諸語　ブリヤート語　ホルチン方言　ダグール語

１．研究開始当初の背景

代表者はこれまで、中国内モンゴル自治区北部、フルンボイル（呼倫貝爾）市で使用されるシネヘン・ブリヤート語、ハムニガン・モンゴル語といったモンゴル系言語の記述的研究に従事してきた。シネヘン・ブリヤート語は話者数約 6,000 名と話者数が少なく、将来的には消滅の危機に瀕することが予測される言語であるが、現在当該言語の記述とドキュメンテーションを継続的におこなっている研究者は代表者以外にいない。当該言語がより深刻な状態（話者数がさらに減少し、次世代への継承が危ぶまれる状態）におかれる前に、できるかぎり一次資料を蓄積・公開し、詳細な文法記述をおこなうことが求められている。

シネヘン・ブリヤート語の話者は約 90 年前にロシアから中国へと亡命・移住した民族集団であるブリヤート、ハムニガンの人々の子孫にあたる。移住後、ブリヤートと一部のハムニガンはフルンボイル市エヴェンキ（鄂温克）族自治旗シネヘン（錫尼河）川流域に居住を認められ、集住してきた（ブリヤートと行動をともにしたハムニガンは、すでに母語であるハムニガン・モンゴル語を話せず、より辺境地域に集住するハムニガン約 1,300 名のみがハムニガン・モンゴル語を話す）。

当該言語が使用されるフルンボイル市は、中国の他の辺境地域と同様、多言語社会を形成している。上記シネヘン・ブリヤート語やハムニガン・モンゴル語のほか、ダグール語、モンゴル語ホルチン方言、ウールト方言、バルガ・ブリヤート語などのモンゴル系言語、ツングース系のソロン語、オロチョン語などの話者がおり、さらに中国語東北方言（東北官話）が使用され、モンゴル系住民は母語のほかに複数の言語を使用するポリグロットとなっているケースが多い。

こうした多言語接触の状況下において、シネヘン・ブリヤート語に中国語やその他のモンゴル語諸方言の特徴があらわれるようになった（一方のハムニガン・モンゴル語については、他者がアクセスしにくい地域に集住したため、中国語やモンゴル系言語から被った影響は比較的小さい）。なかでも中国語、ダグール語、モンゴル語ホルチン方言とは移住後恒常的に接触があり、シネヘン・ブリヤート語の音韻・語彙・形態・統語構造にそれぞれ一定の影響を与えてきたことがこれまでの調査から強く推定される。

このように外的影響により変容しつつあるシネヘン・ブリヤート語については、これまでも全体像を記述すべく研究を継続し、中国語との接触により、形態法を中心に本来有していなかったと考えられる特徴がいくつか見られるようになってきていることを、本研究課題遂行までに代表者は明らかとしてきた。しかしながら、文法構造の大きく異なる中国語との接触による影響は比較的目立つ特徴として抽出されるが、文法構造が似ているモンゴル系言語から受けた影響／それら言語に与えた影響については、見落としている要素も多いと予測される。このことは、ロシア連邦内で使用されるブリヤート語とシネヘン・ブリヤート語との間に、中国語からの影響とは考えにくいいくつかの相違点があることを根拠とする。

そういった予測を検証するためには、各言語の一次資料を分析しつつ対照する必要がある。とくに、ブリヤートの人々が移住する前からフルンボイル市で使用されていたダグール語・モンゴル語ホルチン方言の記述は、いくつかの先行研究があるが、分析に利用できるようなかたちの一次資料は十分に蓄積されていなかった。

２．研究の目的

上記のような現状をふまえ、本研究課題では以下の 3 点を目的とした。1) 中国北方に分布するモンゴル諸語であるシネヘン・ブリヤート語、モンゴル語ホルチン方言、ダグール語などの言語資料の蓄積と公開を進める、2) シネヘン・ブリヤート語の文法記述をできるかぎり進める、3) 古い時代のモンゴル語と、現在のシネヘン・ブリヤート語や周辺モンゴル諸語の文法形式との異同を比較・対照することで、それぞれの言語の通時的変化と相互影響について分析を進める。

３．研究の方法

上記の研究を遂行するために、以下の方法をとった。1) これまで代表者が収集してきた音声資料を整理し、統合する。2) 収集してきた音声資料のうち、未公開のものについて文法情報を付し、公開にむけて整形する。3) 母語話者の協力のもと現地調査を実施し、新たな言語資料の採録、未分析資料の分析をおこなうほか、とくに文法上の問題に関する聞き取り調査（エリシテーション）を実施する。4) 関連分野の文献収集をおこなう。5) 公刊済みの中期モンゴル語資料を対象に、文法上の特徴について計量的に分析する。

2) については、ダグール語に関しては初年度に研究協力者となっていただいた東京外国語大学大学院の山田洋平氏を現地に派遣し、文法調査と用例収集に従事していただいた。シネヘン・ブリヤート語の調査は代表者が現地および日本国内で、またモンゴル語ホルチン方言の語彙・文法調査は留学生を対象に大学内で実施した。

４．研究成果

研究目的 1) および 2) に基づき、研究期間内に代表者による現地調査を 3 回（海外 2 回、国内 1 回）および協力者による調査を 1 回おこなった。当初計画よりも実施回数は少なか

ったが、効率的な調査ができたこと、また成果公刊も当初想定していたよりも充実したものとなった。全体を総括すると、1) ～ 3) いずれについても当初目的を達成できたといえる。ただし 1) に関しては期間内に公刊が間に合わなかったものもある。期間終了後の公刊をめざし、現在編集作業をすすめている。以下、3 点の目的それぞれについて、その成果を報告する。

1) 中国北方のモンゴル諸語資料の蓄積と公開：これまで収集してきたシネヘン・ブリヤート語音声資料の整理・分析を進め、研究期間内に 1 点の文法情報つきテキスト資料を公刊した（５.〔論文〕(3)）。このほか、3 点の文法情報つきテキスト資料を収録した書籍を、中国北方少数言語を対象とした研究に従事する他の研究者とともに公刊すべく、編集作業を進めている。

このほか、過去に整理した民話を中心としたテキスト資料について、言語ドキュメンテーション支援ツールのひとつである FLEx に取り込み、横断的検索が可能となるよう加工した。さらに資料の恒久的保存のために、過去記録した資料（DAT, MD を媒体とした音声資料、miniDV による映像資料）をそれぞれデジタル・ダビングした。このほか、モンゴル語ホルチン方言については母語話者である留学生を被調査者として、用例収集をおこなった。用例収集にあたっては、中国・内蒙古大学がかつて実施した言語調査に用いた例文調査票を用いた。この例文調査票を用いた調査は、シネヘン・ブリヤート語（2006 年）、ハムニガン・モンゴル語（2007 年）に続き、代表者としては 3 言語めの成果として成果を公開した（〔論文〕(1)）。この調査票に基づくモンゴル諸語の例文データは、代表者以外の調査によるものも含めて計 11 言語あり、これらデータの統合を今後の課題として残している。なお、こうした横断的データをもとにした文法事項についても口頭発表をおこなった（〔学会発表〕(9)）。

また、研究協力者の山田氏は 2014 年にダグール語の現地調査を実施し、その成果の一部を公開した（〔論文〕(2); 〔学会発表〕 (5)）

2) シネヘン・ブリヤート語の文法記述：代表者が継続的に従事しているシネヘン・ブリヤート語の文法分析をすすめた。この調査の成果としては、調査技法に関して 2 件の口頭発表（〔学会発表〕(3), (7)）をおこなった。また文法記述については、とくに文末の動詞屈折形式および人称標示形式に焦点をあてた分析をおこない、その成果を公表した（〔論文〕(5)；〔学会発表〕(1), (4), (8), (9)）。

3) 古い時代のモンゴル語と、現在のモンゴル諸語との比較対照：2) において焦点をあてた文末の動詞屈折形式のふるまいについて、中期モンゴル語で書かれたとされる『元朝秘史』をテキストとして分析した（〔学会発表〕(2), (6), 〔論文〕(4)）。この結果と 2) の成果をもとに比較・対照をおこない、中期モンゴル語の文末において見られた定形動詞／形動詞（分詞）の使い分けがモダリティによっていること、現在のシネヘン・ブリヤート語のデータを分析すると、そういったモダリティにかかわる区別は人称標示形式の使い分け（述語人称を後接するか／所有人称を後接するか）によっており、両者に相関関係が見られること、またそういったモダリティによる形式の対立はユーラシアに分布するアルタイ型の諸言語にひろく見られること、などを指摘した（〔学会発表〕(8); 〔論文〕(5)）。

このほか特筆すべき事項として、本研究課題の内容を一般向けに紹介するアウトリーチにも力を入れたことを書き添えておきたい。５.〔その他〕に記載の (1), (2), (4), (5) の学生を対象とした研究紹介のほか、〔その他〕(3) のようにより一般向けに本研究課題にかかわるフィールドワークの内容について紹介する機会もつくった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

(1) 山越康裕. 2015. 「モンゴル語ホルチン方言テキスト：日常会話を題材にした基本文例集」『北方言語研究』5: 281-317.

(2) 山田洋平. 2015. 「チチハル・ダグール語の再帰所属接辞：安子匠村出身の調査協力者の発話に現れた形式 -mAA に関する報告」*Altai Hakpo*. 25: 71-84.

(3) 山越康裕. 2016. 「シネヘン・ブリヤート語テキスト (5)：王様と役人になる二人の男の子」『北方言語研究』6: 111-129.

(4) YAMAKOSHI, Yasuhiro. 2016. Predicative non-past participles in the Secret History of the Mongols. *Altai Hakpo*. 26: 85-101.

(5) 山越康裕. 2017. 「シネヘン・ブリヤート語の 2 種類の未来表現：分詞の定動詞化に関する 3 類型」『北方人文研究』10: 79-96.

〔学会発表〕（計 10 件）

(1) YAMAKOSHI, Yasuhiro. “How can we define the “participles” in Mongolic languages?: two problems in Shinekhen Buryat” 1st Annual Conference on Central Asian Languages and Linguistics. held at Indiana University in Bloomigton, USA, 2014-05-17～18.

(2) 山越康裕.「『元朝秘史』における分詞（形動詞）」AA 研フォーラム, 於 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2014-10-09.

(3) 山越康裕.「母語話者の話すことばは正しいのか？：言語データの収集・分析におけ

る悩ましさ」2014 年度第 1 回 FSC コロキアムワークショップ「データと論文の間：フィールドサイエンスにおける論証とは」, 於 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2014-12-05.

(4) 山越康裕. 2015. 「ブリヤート語の文末所有人称小詞」2014 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会, 於 京都大学ユーラシア文化研究センター, 2015-03-27.

(5) 山田洋平. 2015. 「チチハル・ダグール語の再帰所属接辞」2014 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会, 於 京都大学ユーラシア文化研究センター, 2015-03-27.

(6) YAMAKOSHI, Yasuhiro. 2015. "The use of verbal nouns in the *Secret History of the Mongols*" The 12th International Altaistic Conference. held at Seoul National University, 2015-07-17.

(7) YAMAKOSHI, Yasuhiro. 2016. "Language documentation of Mongolic languages spoken in the northeast of China: a case of Shinekhen Buryat" Documentary Linguistics: Asian Perspectives (DLAP-2016). held at the University of Hong Kong, 2016-04-08〜9.

(8) 山越康裕. 2016. 「ブリヤート語未来分詞の文末用法：分詞の「再名詞化」によるもダリティ表現」日本言語学会第 152 回大会. 於 慶應義塾大学, 2016-06-25/26.

(9) YAMAKOSHI, Yasuhiro. 2016. "Mongol töröl khelnüüdijn insubordination (gishüün bus ögüülber)" The 11th International Conference of Mongolists. held at Ulaanbaatar, Mongolia, 2016-08-15〜18.

(10) 山越康裕. 2017. 「ブリヤート語の動詞 *a- の屈折形式に由来する接語類」2016 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会, 於 京都大学ユーラシア文化研究センター, 2017-03-30.

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

(1) ［アウトリーチ］山越康裕. 2015. 「おもしろいぞ世界のことば:国境越えたらしくみも変わる〜中国東北部のモンゴル系言語」フィールド言語学カフェ：世界の言語で読む Le Petit Prince. 於 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2015-11-05.

(2) ［アウトリーチ］山越康裕. 2016. 「中国領内のブリヤート」フィールド言語学カフェ・特別編「ブリヤートの言語と文化」. 於 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016-01-14.

(3) ［アウトリーチ］山越康裕. 2016.「中国北方の少数言語〜シネヘン・ブリヤート語について語ろう」. 於 書店 B&B（東京都世田谷区）, 2016-02-27.
http://bookandbeer.com/event/2016022702_bt/

(4) ［アウトリーチ］山越康裕. 2016. 「中国北方のモンゴル系危機言語の文法記述とドキュメンテーション」フィールド言語学カフェ・特別編「アジア地域の言語と文化」於 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016-11-19〜23.

(5) ［アウトリーチ］山越康裕. 2016. 「中国東北部でモンゴル諸語を記録する」フィールド言語学カフェ・特別編「アジア地域の言語と文化」於 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016-11-19.

６．研究組織

(1)研究代表者
山越康裕（YAMAKOSHI YASUHIRO）
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授
研究者番号：70453248

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
山田洋平（YAMADA YOHEI）
東京外国語大学・大学院総合国際学研究

科・大学院生（博士後期課程）